

個性尊重と連帯

総合リハビリテーション学会

学会長 高 見 正 利

「地道な努力、連夜の吉報」(神戸新聞)と新聞がノーベル賞受賞を讃えるように、自然科学が成果を挙げる一方で、政治経済の分野では福祉社会の実現とは真逆に向かうようなことがたてつづけに起きました。社会は、もやもやした不安や疑念があるにもかかわらず、威勢の良い掛け声や強引かつ一見わかりやすそうな説明によってかき消されるという、危なっかしい様相を呈してきました。

昨今は、平和や社会福祉の実現に厳しいものがあり、格差拡大という社会情勢は若者が仕事に就くことを当てにできなくしています。希望が持ちにくくなると、自己肯定感を喪失して孤独になっていくのでしょうか。スマートフォンを駆使して人とつながろうとしますが、そこには仲間うちだけの世界が作られ、閉鎖空間での会話となりがちで弊害も生じています。今の社会では人とのリアルな関係が作られにくいのもかもしれません。人は社会的存在であり、孤立しては生きにくいものです。

今年のテーマ「支え、支えられ」からは、「人はもっと連帯を」ということを意識させられます。それには、表面的な同調で済ませるのではなく、お互いを尊重し、理解するように努めませんか、ということでしょう。社会には多様な人格が存在し、時とともにそれはいろんな側面を見せます。ですから、人を理解することや相手の立場に立つことは、口でいうほど簡単ではありません。一面的ではなく、多面的なものの見方が必要でしょう。めんどうだからと言って短絡的に結論を出すのではなく、考えが対立してもその違いを議論によって丁寧に突き合わせることでより統一された新しい概念や方法に到達する、ということはよく経験することです。妥協という方法もその1つですが、いずれにしても複雑なものを理解しようとする姿勢や努力が必要です。建学の精神の一つ「個性尊重」は単に個性を尊重するということだけではなく、個性の“違い”を尊重するということでしょう。

そういう意味において、一見わかりやすい議論には注意が必要です。権威や肩書で決めてしまうことやレッテル貼りはその最たるものです。最近、テレビでよく解説されている憲法学者、木村草太氏は「人間はあからさまに分かりやすいものを見せられた時、心に大きな隙ができる。とても分かりやすい(説明)は、そこで語られていないことからつい目がそれてしまっただけで見えにくくする。」(「テレビが伝えない憲法の話」PHP新書)と注意を促しています。そういえば、「太陽は我々の見るように地球全体を現してみせるが、同時に星や天体を暗くして隠しもする。」と、同様な警句を述べている先達(フィロン)もいます。

ものごとをよく理解するためには、常に「なぜ?」という疑問符をつけて一度立ち止まるとよいでしょう。あたりまえのことでも、本当にこれでいいのだろうか、なぜそうだろうと、あえて意識するのは。勝手に決めつけずに他の観点からも眺めて自由な発想をする、そうすることによって、知の土台が築かれていきます。そうすると、闇に一筋の光が射すようにものごとの見通しがよくなり、他者への理解も深くなって、世界が一層広がると思います。学術集会での議論も、考えるきっかけにしましょう。